

昭和50年基準消費者物価指数改正の概要

改正の趣旨

消費者物価指数は、一般消費者世帯が日常生活を営むうえで必要な商品及びサービスの価格を総合した物価の変動を時系列的に測定するものですが、消費構造や価格体系の変化にともない、指数の基準時及びウエイトの算定期間を昭和45年から50年に改めるとともに、指数品目の拡充改廃を行い、消費者物価の変動をより正確に測定できるように改正を行った。

主要な改正点

- (1) 基準時及びウエイトについて……………基準時及びウエイトを、昭和45年から昭和50年（季節商品については49

年、50年の2ヵ年間）に改めた。

- (2) 指数品目について……………家計支出上重要度の大きい品目及び商品の出回りの変化を考慮して59品目を追加した。一方重要度の小さくなった品目及び商品の出回りの変化により、他の品目で代表できる7品目を廃止し485品目を選定した。

新旧指数の接続

新しい指数は、全系列について昭和50年1月から作成しており、45年基準の50年1月以降の指数は全て廃止した。また、49年12月以前については、各系列ごとに、昭和45年基準の50年平均指数値をリンク係数として、50年＝100に換算し接続した。

5市平均（水戸・日立・土浦・古河・下館）

〔注〕見出し欄中、月比とあるのは対前月比、年比は対前年(同月)比。

年 月	総 合		食 料		住 居		光 熱		被 服		雑 費		季節商品を除く総合								
	月比	年比	月比	年比	月比	年比	月比	年比	月比	年比	月比	年比	月比	年比							
昭和45年平均	57.9		7.8	56.0	8.6	58.9	9.5	59.8	2.9	54.8	7.6	61.7	5.8	57.6	6.8						
46	61.7		6.6	59.5	6.3	63.0	7.0	62.9	5.1	60.0	9.4	65.2	5.8	61.4	6.6						
47	64.4		4.3	61.0	2.5	66.3	5.2	63.2	0.6	64.5	7.6	68.7	5.3	64.7	5.4						
48	72.1		12.0	69.0	13.1	72.6	9.4	65.7	4.0	77.7	20.5	74.6	8.6	72.3	11.8						
49	90.3		25.2	89.5	29.7	92.4	27.4	86.8	32.1	96.0	23.5	88.4	18.4	89.9	24.4						
50	100.0		10.8	100.0	11.8	100.0	8.2	100.0	15.2	100.0	4.2	100.0	13.2	100.0	11.2						
51	109.0		9.0	109.1	9.1	105.3	5.3	106.3	6.3	108.1	8.1	110.7	10.7	108.2	8.2						
52	118.4		8.6	116.6	6.8	112.1	6.4	113.6	6.8	119.3	10.3	123.0	11.1	117.5	8.5						
昭和53年1月	119.9	1.0	4.5	118.3	2.7	3.8	114.0	0.4	4.8	113.1	-0.4	-0.4	118.3	-0.2	4.6	125.3	-0.1	5.9	119.8	0.1	5.7
2	120.4	0.4	4.0	119.0	0.6	2.2	113.9	-0.1	4.4	113.0	-0.1	-0.5	116.8	-1.3	3.5	126.7	1.1	6.9	120.1	0.3	5.5
3	121.4	0.8	4.3	119.9	0.8	2.7	115.4	1.3	5.4	112.8	-0.2	-0.7	118.4	1.4	2.3	127.4	0.6	7.2	120.6	0.4	5.3
4	122.7	1.1	3.7	120.7	0.7	2.7	117.1	1.5	4.6	112.8	0.0	-0.7	121.5	2.6	4.0	128.7	1.0	5.0	122.0	1.2	4.9
5	124.3	1.3	4.1	121.9	1.0	4.4	117.8	0.6	4.4	112.8	0.0	-0.7	129.4	6.5	6.0	128.8	0.1	3.5	123.2	1.0	4.5
6	123.3	-0.8	4.0	118.4	-2.9	3.8	118.0	0.2	4.3	112.8	0.0	-0.7	132.7	2.6	7.1	128.7	-0.1	3.3	123.7	0.4	4.3
7	123.1	-0.2	4.1	118.7	0.3	4.6	118.2	0.2	4.5	112.8	0.0	-0.7	129.6	-2.3	4.7	129.0	0.2	3.7	123.5	-0.2	4.0
8	123.5	0.3	4.0	121.5	2.4	4.4	118.5	0.3	4.8	112.8	0.0	-0.7	123.4	-4.8	4.8	129.0	0.0	3.4	122.8	-0.6	4.0
9	124.4	0.7	2.9	123.3	1.5	2.4	118.5	0.0	4.0	112.6	-0.2	-0.9	125.7	1.9	4.2	128.8	-0.2	3.3	123.4	0.5	3.4
10	125.6	1.0	3.3	126.5	2.6	4.0	118.7	0.2	4.9	106.8	-5.2	-6.0	126.0	0.2	2.4	129.1	0.2	3.5	123.1	-0.2	2.8

消費者物価指数の作り方のあらまし

ある基準となる年に家計で購入したさまざまな品物を入れた大きな買物かごを考え、この買物かごの中身と同じものを買いそろえるのに必要なおかねが、いくらになるかをあらわすのが消費者物価指数です

まず、家庭の主婦が日常持って歩く買物かごを大きくしたものを考えます。この大きな買物かごの中に、指数の基準時である昭和50年に、私たちが実際に買物した品物を家計簿で調べて、たとえば、月平均でみて、米20kg、いわし110g、牛肉570g、キャベツ2kg、しょう油1.9ℓ、2級酒1.1ℓ、なべ1個、電気代120KWH、ワイシャツ1枚、皮ぐつ1足、ビタミン剤1箱、電車賃5回、たばこ15箱……というように全部の品物を入れます。そして、この買物かごの中身全体のねだんを考えてみましょう。

このかごの中には、昭和50年に家庭で購入したあらゆる品物が入っていますから、このかご全体のねだんが、仮に15万円(月平均)したとするなら、これは50年の物価のもとで生活費が実際に15万円かかったことを示しています。つぎに、この50年の買物かごと同じ中身を51年のある月で買ってみましょう。買物かごの中身は同じですが、個々の品物のねだんは、その後、値上がりしたり、ものによっては値下がりしていますので、かごの中身全体のねだんは前と同じではなく、仮に16万5千円したとします。これは、50年と同じ内容の生活を、51年のある月で営むと、物価の値上がりによって、16万5千円かかることを示しています。この買物かごの中身全体のねだんの動きを指数化して、50年の15万円を100とすると51年のある月の16万5千円は、比例計算で110となります。これが50年を基準時とした51年のある月の消費者物価指数の数字になるわけです。

したがって、消費者物価指数の作り方を簡単にいえば、毎月暮らしに必要な品物を買物かごに入れて、その買物かご全体の費用が、月々の物価の動きによっていくらに変わっていくかを、指数であらわしたものといたしましょう。

指数品目は、家計支出上重要なもの、価格の変動の様子が代表性があるものを選びます

指数品目は、家計の全体の中で支出額の大きな商品で、たとえば、米、牛乳卵、セーター、背広、せっけん、電気、電車賃というように選んでいきます。支出額の小さい商品、たとえば、ぬい針や、

消費者物価指数は、世界各国でほぼ同じしくみで作られています。それは、多くの場合、約100年前(1864年)にドイツのラスパイレスという経済学者が考案した計算式によっています。この作り方は、マーケット・バスケット方式とって簡単にいえば、つぎのような方法です。

消費者物価指数は、家計に直接影響のある物価の動きをまとめて測ろうとするものですから、指数品目は、家計の上で、重要な商品を偏らないように選ばなければなりません。このため、家計調査の結果を調べて家計の全体の支出の中で支出額の大きな商品で、たとえば、米、牛乳卵、セーター、背広、せっけん、電気、電車賃というように選んでいきます。支出額の小さい商品、たとえば、ぬい針や、

かん切のような商品は、その値動きが家計にほとんど影響しませんので、それだけで選ぶということはありません。そこで品目を選ぶ基準としては、その品目の支出が家計の総支出額の、ほぼ1万分の1以上であるかどうかにめどをおいて選んでいます。なお、家計総支出額の中でその品目の支出額がどれだけの割合かを示している数字を、その品目のウエイトといいます。

指数品目を選ぶ場合の、もう一つの考え方は、同じ種類の商品の値動きに対して代表性のある商品を選ぶということです。

個々の商品の値動きを総合するときには、その商品の家計に占める割合に応じて、重み(ウエイト)をつけます

消費者物価指数は、見方を変えれば、かごの中に入れた皆さんの商品の毎月の値動きを、各商品の支出金額の家計費全体に占める割合(ウエイト)を加味して総合し、全体の物価の変化を測ることと同じになります。

このウエイトをつけるということの意味を、簡単な例で説明しましょう。たとえば、米、豚肉及びみその3品目によって物価指数を作るとして、今月のねだんが、ある月に対して米は10%値上がりして、ある月の100に対して110に、豚肉は30%も上がって130に、そしてみそは逆に10%下がって90になったとします。これを単純に平均すると、

$$\frac{110+130+90}{3}=110$$

となり、物価は、ある月の100に対して10%上昇と計算されました。

ところで、家計支出上この3品目に対する重要度はかならずしも同じではありません。家計簿でこの3品目の支出金額の割合を調べると、米6、豚肉3、みそ1であったとします。そこでこれらのねだんの動きを、支出金額の割合(ウエイト)を加味して計算すると、

$$\frac{110 \times 6 + 130 \times 3 + 90 \times 1}{6 + 3 + 1} = 114$$

となります。単純に平均した場合にくらべて、豚肉の値動きが反映されて14%の上昇となりました。こういう計算方法をウエイトをつける、つまり各商品の全体に占める割合を加味するとい、統計の用語では加重平均するといいます。

指数品目として採った485品目は、それぞれ値動きを異にしています。大幅に値上がりしたのもあれば、あまり値上がりにくいもの、なかには値下がりしているものもあります。このような個々の品目のねだんの上がり下がりをもとめて平均して指数を作るので、この場合に、いま述べたようなウエイトを考えることが必要になるのです。これは、家計であまり重要でない商品が少々値上がりしても、生活費全体にあまり影響しませんが、たとえば、米や豚肉などのような重要な商品の値動きは生活費に大きく影響するからです。

資料：総理府統計局「消費物価指数のしくみと見方」より